
「あとで聞いた」 【お題：面影】

raki & 竜司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「あとで聞いた」

【お題・面影】

【Zコード】

N7244M

【作者名】

rakii &竜司

【あらすじ】

作者：竜司

嘆く青年、サイドメニュー。そして容姿名前共にイケてる青年、テニス。

二人の前に現れたグルグル。

グルグルの家にいる美少女、オリジナル。

人生とは何か、そして物語のラストに飾られる面影の正体とは

!?

四人を軸に語られる不思議が織り成す掌編物語。

* この小説はブログや他小説サイトにも掲載しています

(前書き)

「いつも、監修元初めまして？」龍司です。

今回、初めての掌編に挑みました。稚拙な文体につきましては、「どうか」と承下さい。

かなり短いので十分くらいで読めてしまつと思します。トーマは「面影」です。しかし、あとから読んだり「なぞだ」つや」って思いました。

では、パークーパーにじゅうべ。

「ああ、もうダメだ

サイドメニューは言った。

「人生って、切っても切り離せないものがあるでしょ？ 例えば、僕の名前とか。サイドメニューってなによ。名付け親の顔が見てみたい。僕、苦しんでます」

すると、テニスがやってきて、サイドメニューの肩を叩きながら、愉快にこう言った。

「なああ～～に、心配ないわ。この世のことは歎み飛ばす、ほら、つべこべ言ってないで、ライオンキング観てきなよ。きっと心が晴れ晴れるよ」

「えっ？ 本当？」 じのドロドロの心をサラサラに戻せるの？

「あたぼ～～よ。なんなら、キヤツツでもいいぜ」

サイドメニューは、しばらく空を見ていた。かなり爽やかな表情で。しかし、すぐに顔つきが暗くなつた。テニスは困惑した。

「ど、どうしたんだい？」 サイドメニュー君

「テニス君、僕は……気付いた。何故、君はそんな幸せそうなのか。それはきっと、名前が格好いいからだ。僕とは天とマントルの差だ」「マントル？」 そこまで行くのかよ。驚きだな

「……つか、もういいよ。君みたいな何もかもうまくいくてる感じの奴と一緒にいたくナイ。自分が惨めに見えてきた」

サイドメニューのその一言に、テニスは目つきを変えた。

「何もかもうまくいくてるだって？ そんなわけないだろ。わかった風な口をきかないでもらいたいな、サイドメニュー君

「いやいや、君だつてわかつた風な口きくなつて。完全上から田線だしつ……、なにが悩み蹴飛ばせだよ、はは」

「誰も蹴れとは言つてないよ。君は案外適當だな。顔も名前も」

「何だと？ 今何て言つたお前？」

貴様

とうとう一人はつかみかかつた。その時だつた。

「やめないか！」

「！？」

「誰だ！？」

突如、二人の前に姿を現したのは……

「私は、グルグルだ」

そう、グルグルだつた。

「何のようだ。グルグルさん」

サイドメニューがグルグルを睨んだ。

グルグルは言う。

「いや、何というか、見ていられなくなつたからさ。君たち、ところで教えてくれよ。そんな下等な争いをして、楽しいのか？」

「何？」

テニスがグルグルの前に立つた。

「下等だつて？ どの辺が下等なんですか？」 グルグルさん

「うん、テニス君。君の言うことはね、まさしく眞実だ。確かにサイドメニューは、顔も名前もヤバい。全然いけていない。彼は、ダメさい。それは確かだ」

「だつてよ、サイドメニュー」

でもね 、とグルグルは続ける。

「だからといつてなんだと言うのか。いかに顔が終わつていようが、名前がキモかろうが、切つても切り離せないコンプレックスを他に露出しなくてはならない人生であるうが、それはかなり、虚無的だ。至極、どうでもよいことだ。いや、もつと言つなら、本質を捉えていない」

「本質ウ……？」

「テニス君。もしかしたら、君のように恵まれた容姿や名前を有している人間には、これは一生かかってもわからないことなのかもしない。その意味で言えば、ある意味、君みたいな人は恵まれていないとも言えるだろ?」

「ああ、僕が恵まれてない」となんかねつ！　ねえつ！　ねえんだつ！」

「ほら、そういう所だ。もう少し慎みたまえ。己を冷静に客観視するのだ」

「うつせ！　うつせ!うつせ！」

テニスは去つた。

グルグルは、膝を抱えて体育座りをしているサイドメニューに近寄つた。

「初めましてかな、サイドメニュー君」

「…………」

「君が暗い気持ちになるのは仕方がないことだ。だが、どうにもならないわけではない」

「…………」

「幸せという言葉の響きが、いつかきっと君を、照らすはずだ。彼には決して浴びることができない光がね」

「…………彼？」

「テニス君のことさ。いや、しかし、私は言い過ぎたかもしれない。決してというのは言ひ過ぎか。もしかしたら、これから彼の人生にも、考え方が変わるような大きな転機が訪れるかもしれない」

「しれないしれないって、あんま確証ないですな」

「ちょうどいい。サイドメニュー君。私の家に来なさい。おいしいケーキをご馳走しよう」

サイドメニューは、グルグルのあとを、とぼとぼと付いていった。

グルグルの家は案外小さかった。入つてすぐサイドメニューの田

に飛び込んできたのは、美しい女だった。

「紹介するよ。彼女はオリジナールだ」

オリジナールは、礼儀正しくお辞儀をして、グルグルとサイドメニューを迎い入れた。

「あ、初めまして。サイドメニューです」

「サイドメニュー君、いや、もう面倒だから、サイドと呼ばう。サイド君。彼女は口がきけないんだ。悪く思わないでくれ」

「そなんですか、大変ですね」

「大変……か」

「あ、いや、別に偏見してるわけじゃ」

「いいんだよ。サイド君。わかってる。オリジナール。今日買ったケーキの余りがあつたのう。出してやつてくれ」

そう言って、グルグルは帰ってきて早々に、玄関に向かつてしまった。

「私は用がある。ゆつくりしていくれ」

グルグルはどこかへ行ってしまった。

サイドはとりあえず椅子に座った。冷蔵庫を開けて、ケーキを探すオリジナールを眺める。見た目からして十六か十七といった所だろう。グルグルの娘なのだろうか。

しばらくすると、目の前に美味しそうなケーキが出された。オリジナールは無言で「どうぞ」と言った。

「いただきまつする」

見事に滑つたが、サイドは構わぬケーキを食べた。とても美味しい。甘さが控え目で、さっぱりしている。

「いやあ、なんと美味しいケーキ……、嘘だ、こんな旨いケーキがこの世に……」

「あたしが作つたの」

やけに可愛い顔をしてそう言つたのは、サイドを微笑ましい笑顔で見つめるオリジナールだった。

「あ、マジですか。あなたが作つたんですか。それは道理で、やつ

ぱ美しい人が作ると、それなりのものに……」

「ありがとうございます。嬉しいです」

「いやいや、どうも。ところであなた、口がきけてますよね？」

今、確實に、いやまさかの幻聴ですか？　このやりとりは……

「本当は話せます。でも、おじさんの前では恥ずかしいから、話せないの」

「え？　恥ずかしい？　てか、僕は大丈夫なんだ」

「あたし、極度の人見知りなんです。だから、おじさんの前では、小さい頃から静かな所ばかり見せてきたし、今さら、普通に話すなんてできないの」

「はあ……」

「まあ、あなたみたいな人は怖くないから平気」

「？」

「逆にかんがえれば、どう思われたって問題ないってわけ。あ、氣を悪くしないでね、そういうつもりで言つたんじゃ」

「いや、まあね。へへへ。君の言いたいことはわかるよ。どう見たつて下等な生物だもんな、僕。いよいよ、氣にするなって。逆に言えば、話しかけやすいというプラス思考なんてできるか馬鹿。もう限界だ。僕は今までいつもこうだった。こういつ扱いだつた。家族くらいのもんだ。優しかったのは。俺は他人と関わるのをやめるよ。今日限りだ」

一気にまくし立てたサイドは、ガシャンと音を立てて席を立つた。皿の上でフォークが小刻みに揺れる。サイドの瞳には、涙が薄く浮かんでいた。

サイドは家の外に出て、叫んだ。

「この世は腐ってる！　不条理だ！　……俺は、幸せになんかなれない！」

オリジナルも慌てて外に出た。

「そ、それは違うよ、サイドメニューついー

「オリジナル！　その名を易々しく口にするなッ

「十分易々しいよつ……このバーカー

君に恋心を抱いた俺は馬鹿だつたああ！　お前の言つ通りだつ

「ええー? やだつー! ナニイツ

「キイイイ。腐り過ぎだろ世の中アアアアアアアアアアアアアア」

「グルグルおじさん！」
変な人がいるう。助けてえ

「元メエグルグルとは口きくなかったのではなハのえ!?

カニノ筋

死んでよキモイー！」

「ギヤアアアアア」

數年後。

グルグルの元に、一人の男が現れた。

「やあ、久しぶりだね！」

「お久しぶりです」と小さく言った。男は、
グルグルは気軽に声をかけた。

男の容姿は、良いか悪いかで言えば、極めて微妙だつた。見方によつては、普通に良く見える。だが、見方によれば、格好をつけ過ぎていることが伺い知れてしまう。

「覚えているかね？　何年か前、君は私と半ば口論となつた。最後に君がどんな捨て台詞を残して去つたか、覚えているかい？」

男は、静かに空を眺めていた。とても落ち着いている。

「グルグルさん。そういえば、あることに気がついたんです。どう
どんなに顔が良かろうが悪かろうが、名前が終わっていようが始まっ
ていようが、まさしくそんなことは、至極、どうだつていいことな
のだと。本質を捉えていないのだと」

グルグルはそれを聞いて笑い出した。

「今更になつてそんなことを理解したのか。まあ、世の中にはそれすら理解できずに死にゆく者たちすら存在する……」

「ええ、しかしグルグルさん。どうしても真理を掴みきれない所があります。本質とは果たして、万人に共通なのか？」

「いや、共通とは言い過ぎだ。人それぞれに、幸せの基準が異なるのは確かなことだよ。しかしだな、広い意味で言えば、これは半ば宗教じみている。この話し合いすら馬鹿げていると、君ならばいつの日か気付けるだろ？」

「グルグルさん」

「おつと、私は用があつた。家の中にオリジナルがいる。ケーキをご馳走しよう。入ってくれ」

そう言ってグルグルは消えた。男はそつとドアを開けて家の中に入つた。最初に目に飛び込んできたのは、美しい女だった。男はとりあえず椅子に座つた。オリジナルは、冷蔵庫を探している。ケーキを探しているようだ。

「どうぞ」

オリジナルは、ケーキを男の前に置いた。

「ん？　スプーンがないぞ？　いや、フォークでもいいけど……」

「手で食べなさい」

「はつ……まじかよ。やるね……」

男は頬張つた。

そのケーキのうまいことといつたら、まるで地上に天国を見たかのようだ。

「な、なんて旨いんだ？　美味すぎる。有り得てたまらないぞ……」

「嘘だ……」

「買つてきたの」

「あ、わざわざすいません」

「別にあなたの為ぢやないけど。ただ余つてただけ」

「そつすか……」

「そうそう、最近どう？」

「え？」

「……人生はどんな感じ？　つまむこいつてる？」

「ああ、いや～……微妙ですね」

「ふーん」

「あ、そうだ。グルグルとはぢつなんですか？」

話せるよひにな

「……いえ、まだですけど…………」

「そりゃ」

「あの」

「ん？」

「どうしてあなたがそのことを？」

男からは、かつての面影はほとんど消えていた。

(後書き)

「ビニが面影だボケ」と思つた方、その通りです。
どっちかっていうと、テーマは「幸せ」とか「人生」って感じですかねえ？

ま、これからも掌編はたくさん書いていきたいのよろしくお願ひします。あ、勿論、本編の方もガンガン書いてこきますので。では、またいつの日か。

以下、相方rakieの解説。

えー・・・、それこそ、「あとから聞いた」話なのですが、どうやらこの掌編、ただのコメディではなく、結構深いお話だったりするんです。

まず、解釈の点で2通りあると聞かされました。
最後にオリジナル（グルグル）に会いに来た男ですが、読者の方々は誰だと判断しましたか？

作者の龍司によると、サイドメニューとテニスどちらかは断定できず、読者の想像に委ねる形にしたそうです。
僕は完全にサイドメニューだと決め付けていたのですが、タイトルも『あとで聞いた』なので、オリジナルがグルグルと喋ることができないというエピソードはサイドメニューが後にテニスに話したという可能性もあるんですね。
なるほど・・・と思います。

序盤のやり取りから考へると最後に現れた彼はテニスでもおかしくないなあ、と思ひます。

それから、テーマに關して。

この掌編小説は全体がコメディタッチで描かれていますが、実は非常に哲学的なテーマを含んでいます。

ジャンルを決める時、哲学といつ分類があればそちらを選択していましたかもしれません。

竜司は後書きで「どっちかっていうと、テーマは「幸せ」とか「人生」って感じですかねえ？」なんて語っていますが、的を射ていますよね。作者なんだから当たり前ですが（笑）

この発言からも、彼が意図してこのよつたストーリーにしたと言えます。

何が「哲学的」か。それを端的に表せば、まさしくこの物語のキーワードである「名前と容姿」です。

自分の意思では決められず変えることもできないもの。固定的で、自らの存在を決定付けてしまうもの。切っても切り離せないもの。そんな「名前と容姿」をグルグルは「虚無的」「どうでもいい」と言い切ります。

そこに、「人生」や「幸福」の真理が見えて来るんだと思います。そして、先に書いた、2通りの結末。どちらの結末においてもその真理に気付いた人が居る。

サイドメニューは何を経てその真理を得たんでしょうか。

あるいは、テニスは……。

実は、僕たちが何気なく味わっているコンプレックスや優越感、それに対する諦めや克服を内包しているのがこの作品の面白いつらなのかもしだせません。

少なくとも僕はそう思っています。

そういう面では、僕の中編『面影リグレット』とは180度違う作品だと思います。

深みではこの『あとで聞いた』の方が数段勝っていますけどね。僕は竜司の人間性を知っていますから、さうて面白もありました。なかなかいい作品だと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7244m/>

「あとで聞いた」【お題：面影】

2011年5月17日00時55分発行